

明治期近郊リバーサイドリゾート経営の リスクと観光資本家

—墨東・向島の鉱泉宿・有馬温泉と遊園・花月華壇の興亡を中心に—

Risk of Riverside Urban Resort Developments
and their Capitalists of Tourism in Meiji Era:

Focusing on the Collapse Cases of Arima Spa Resort and the Kagetsukadan Park
in Mukoujima along the Sumida River

小 川 功
Isao OGAWA

要 旨

現在でも向島百花園にその面影を残す往時の隅田川堤や向島界隈は江戸期には著名な桜の名所、大名・大商人らの別荘地として知られ、20世紀初頭まで永井荷風のような文人墨客・粋筋に愛好され度々文学・芸術作品等に好んで取り上げられた大都市近郊のリバーサイド・リゾート地帯であった。しかし都市化の進行と度重なる洪水等で隅田川堤の桜などが姿を消し、現在では第一級の観光地であった当時の華やかな様子を偲ぶことは困難である。

本稿では一流料亭・旅館主による独自の構想から出発した明治期の二つの観光施設、和風の有馬温泉と洋式の花月華壇を取り上げ、当初の目論見、客筋、なぜ廃絶したのかを観光資本家の実像を追求する視点から探索した。この種の過去の観光施設とりわけ個人経営の場合、継承された内部資料に接しない限り、一般に経営リスクの解明は困難である。第一次史料の入手には至らなかったものの、幸いにも創始者・継承者が著名人であるため、比較的豊富な新聞記事等の周辺情報からある程度の推測を行うことができた。有馬温泉の継承者が著名な歌舞伎役者の一族であったことは当時の向島界隈の文化的水準の一端を示すとともに、荷風という優れた向島の観察者の著作にその動向が記録される契機ともなった。遊興的色彩の濃厚な鉱泉宿の経営者が自ら長唄・日舞等を愛好し、子息を歌舞伎役者に仕立てるまでの成功談は、同時に観光業と興行界との当時の根源的近親性を示唆している。また花月華壇の創設者・平岡広高や買収者・鈴木久五郎らにリスクを恐れぬリスク・テーカー的性向が濃厚であるという観光資本家としての共通性の存在如何は今後の検討課題であ

る。両施設の数少ない先行研究として東雅夫、斎藤美枝両氏の著書に多く啓発されたほか、着想に際して墨田区観光協会の小川局長をはじめ、当地と関係深い観光企業の各位から数多くのご教示・ご示唆を賜ったことを特記しておきたい。

I. はじめに

「神田川の口元を出て、亀清楼の石垣の陰から、大川の真ん中へ漕ぎ出した一艘の花見船がありました。…帮間芸者を乗せて、船の中央には其の当時兜町で成り金の名を響かせた榊原と云ふ旦那…船も陽気な音曲の力に押されて、徐々に水上を進むやうに思はれます。…傍若無人の振舞ひに散々土手を騒がせた船は、やがて花月華壇の棧橋に纜を結んで、どやどやと一隊が庭の芝生へ押し上がりました」⁽¹⁾

これは明治40年春の隅田川の花見の賑やかな情景を描いた谷崎潤一郎の小説「帮間」の一節である。

また『講座 日本映画1』には明治39年の活動写真作品「活社会の玉乗り」が「浅草の江川という玉乗り一座の出演で、向島の花月華壇や日比谷公園にロケーションして撮られたもので、それらの場所に舞台の玉乗りの玉を持ち出し、玉に官・公・私立のさまざまな大学名を書いて、学生に扮した玉乗り芸人が“活社会”の出世競争をやるといふもの」⁽²⁾と解説されている。

文豪の作品の舞台や、わが国の黎明期の映画のロケ地に登場した花月華壇という遊園地と作品との因縁は後述するが、たとえば撰津国有馬温泉の湯の花を遷し本家を模した温泉宿を営んだ向島秋葉撰州有馬温泉など、隅田川に沿って別荘、鉱泉宿や遊園地、活動写真の撮影所等が建ち並ぶ、いわば芸術・文化の発信地であり、京都でいえば保津川・大堰川に沿った古来貴族の別荘地であった嵐山地区に近接して撮影所等が建ち並んだのと似通った一面を持っていた。

本稿では平成24年5月22日東京スカイツリーが開業した暁には浅草、錦糸町、亀戸等を結び付ける連続的な回遊型下町観光ルートの中核的施設になることが期待されている向島界限を、前々稿・前稿の嵐山⁽³⁾での試論に続いて都市近郊リバーサイド・リゾート経営の事例研究の場として取り上げる。向島の和風の観光施設として秋葉有馬温泉を、洋式の観光施設として花月華壇をそれぞれ一例として取り上げ、どのような客筋に利用されたのか、なぜ廃絶して現在には継承されなかったのか、両施設の経営者の実像を追求することで、彼らが避けられなかった観光経営上の諸リスクについて、主に観光経営論の立場から可能な限り解明していきたい。なお本稿では新聞、会社録、頻出資料等に略称⁽⁴⁾を用い、注記せず本文中に示した。

Ⅱ. 向島秋葉撰州有馬温泉

1. 向島秋葉撰州有馬温泉支店の開業

明治 17 年 11 月 東京市本所区向島請地町 182 番地に有馬温泉の老舗旅館・中之坊を継承した梶木一族⁽⁵⁾が向島秋葉神社の境内⁽⁶⁾千有余坪の地を開き、「客間茅葺二階建一棟…瓦葺の三階造…南に二階家の離れて建てられたるは旅館なり…中島に茶室あり…混堂池畔に有り、湯槽は好心地よく洗はれて、男室女室に区画たる」（墨堤, p148）温泉宿を開業した。文化初年の古図には秋葉社と弘福寺との間に麦とろで有名な「むさしや」「本枝ヤ」等の境内料理茶屋の名が確認できる。（墨堤, p139）江戸期の秋葉神社境内は「神泉の松と称する樹の空より清泉湧出して、諸病に奇効あり」（墨堤, p73）とされた⁽⁷⁾。明治 40 年の地図⁽⁸⁾には三圃稲荷と牛の御前の背後に池沼が描かれ、養魚池があった庵崎の名残を示している。写真-1 の拡大図には 180 番地（秋葉神社）⁽⁹⁾を取り囲むように 179 番地と「崖及草生地」を示す緑色の 182 番地があり、共に旧境内地を形成していた。

明治期までは「神社境内は皆立派な森林をなして」（区史, p1642）おり、とりわけ請地一帯は「庭園用松樹の仕立を以て村の副産物とするかの観あるほど」（区史, p1643）林泉幽邃の勝地であったものと推測される。

有馬温泉が請地に開かれた 17 年時点では先代の梶木源次郎が存命であり、全国的に「有馬温泉炭酸水」を盛んに販売するなど、当时有馬温泉の物産振興に努めていた時期とも重なる。「中之坊梶木源之助同店なり」（墨堤, p148）とは 25 年 1 月 20 日先代源次郎が 80 歳で死亡し、家督相続した源之助の経営する「中之坊」のチェーン店の意味であろう。また「美人なし、別嬪は他よりお連れ下され」（墨堤, p148）云々も、当初は撰州有馬湯の薬効・靈験を宣伝することに力点を置き、純然たる鉱泉場を志向したのであろう。特に秋葉神社に立地したのは、信徒で薬種商の守田治兵衛⁽¹⁰⁾の斡旋に加え、この地が清泉湧出して諸病に奇効ありとされた靈地⁽¹¹⁾であるため、出店地に相応しいと見たのであろう。23 年に上京した「みなか紳士」の「滞京の記」でも「牛の御前とかいへる社殿の前を過ぎ左に折れ右に曲がりて凡そ六七町を歩するに田圃あり農家あり古松老杉森々たるの間に一基の夜灯立てり。硝子に有馬温泉の四字を記す…竹藪に添ふて進み入れば果して温泉あり…四下幽静にして檐に松風の颯々たるを聞くのみ。寔に仙境の思ひあり。これ小生着京第二の愉快なり」（M23.4.24 東朝④）と幽静なる仙境と評した。文中の「一人の女中、小生等を見て軽く会釈を呈じ、『こちら』へと案内して奥まりし座敷に請ず」（M23.4.24 東朝④）る様は画工山本松谷が 31 年に描き『新撰東京名所図会』に挿入された著名な「向嶋有馬温泉之図」⁽¹²⁾を彷彿させる光景である。同じく挿入された「向嶋秋葉神社の図」（写真-2）と、写真-1 の地籍図を対比すると、中央を貫く秋葉神社参道の西側一帯の細長い境内地が 182 番地に相当し、

図には一切説明はないのであるが、その一番奥の和風建築群が有馬温泉の本館と「奥まりし座敷」に相当するようにも読み取れる。

社殿の西側の「小山」が、『新撰東京名所図会』に出てくる「栽籠繁茂く枝を交し、瓦葺の三



写真-1 東京郵便局編纂『明治四十年一月調査東京市本所区全図』（部分）

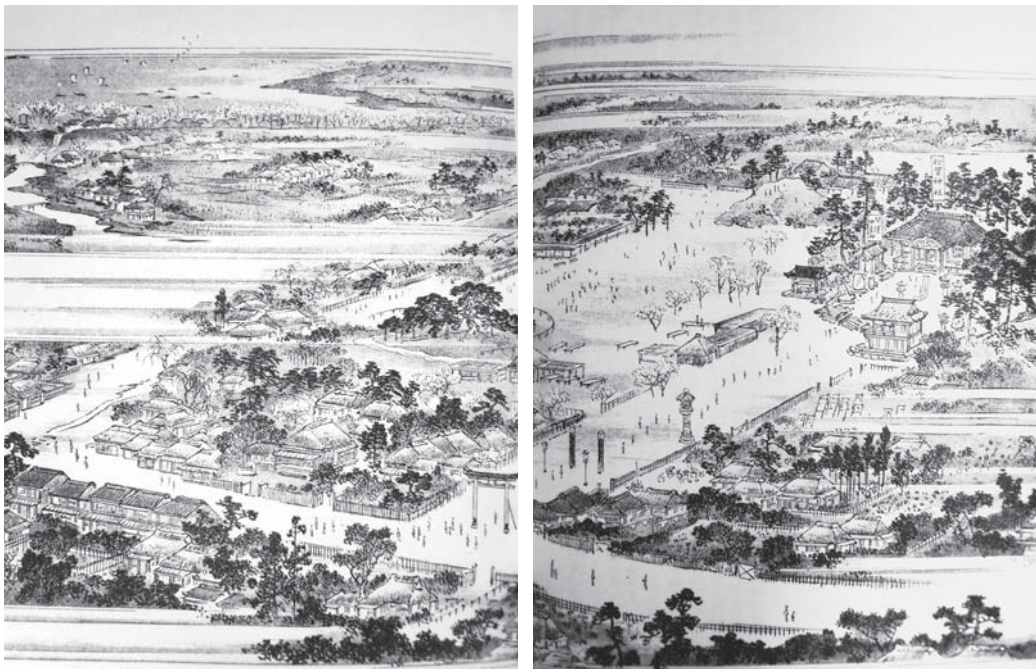


写真-2 「向嶋秋葉神社の図」『新撰東京名所図会』

階造は小丘を抱きて立てる」(墨堤, p148) や、開業当初の広告にもある「小山」(M18.6.27 読売④)に相当すると思われる。23年に相応の資産家と思しき「みなか紳士」3人が「珍膳美羞山の如く排列…酒を飲み肴を食ひ漸やくして酩酊」(M23.4.24 東朝④)した料金は「金二円三十三銭と記せり。三人翻して曰く実に高い入浴料なりと相呟いて同家を出づ」(M23.4.24 東朝④)とあり、相当の高級料亭であったと考えられる。「摂州有馬の湯花を遷し、温泉宿を営」(墨堤, p148)んだ当初の営業方針がその後東都での利用客の実需に鑑み、次第に遊興色を増しつつ純然たる料理旅館に転換していったものと思われる。

2. 広告に見る初期の有馬温泉の営業状況

開業当初の明治18年「向島秋葉摂州有馬温泉 御旅宿御料理 開業以来諸病に実効奏する事実に不思議なる故、諸君様日増御来臨難有、且暑さの時節には大木小山釣堀等庭中に有、空気宜敷、御養生旁不相替御来車奉希上候」(M18.6.27 読売④)、『東京絵入新聞』にも「樹蔭小山の空気宜敷、又庭中に釣堀有り」(M18.6.28 外史, p1385)とほぼ同文で温泉の効能を広告した。23年「○向島花見例年御貸席 本年非常廉下に仕猶御大勢様は以前御申越奉願上候。○折詰御弁当廉下に調進仕候 向島秋葉御料理 有馬温泉」(M23.3.28 読売④)、「○全国諸君御得意様へ広告仕候。弊店義御宿泊暫時休業仕候処、御来車に預り恐縮奉候。然るに今般御宿泊支店新築出来仕、御座敷向南北口、昔年樹木沢山風入充分流通し、静なる事深山の如く、六七町にて浅草観音、吉原之繁市有、御用弁は市中の如くに候間、諸君様不相替御来車奉希上候。○御料理東京向島秋葉元祖有馬温泉 御旅館御宿泊支店」(M23.7.19 読売 別刷①)と、この頃需要に応じ宿泊専用の支店を新築、「○御旅館東京向島秋葉有馬温泉、○御料理東京向島秋葉有馬亭」(M23.7.29 東朝③)と旅館を有馬温泉、料亭を「有馬亭」と名称を使い分け、「海より山…芝浦は…今年の夏は非常の不景気にて…これに引換へて鶯谷の伊香保、向島の有馬温泉、根津の磯部などは可なりの客もあり、概して納涼に出かけ汗を洗ふ客は少なく、納温に出かけて汗を流す客が多いと」(M23.8.2 東朝④)報じられた。

24年6月18日能楽師の梅若実は「午前よりおみね同道松倉町の花菖蒲ヲ見ニ参ル。盛り。夫より向嶋秋葉ノ有馬温泉へ参り中飯。八景園へ参り…」¹³と行楽の途中に立ち寄っている。26年「弊棧は庭前に蓮池大樹有て清涼風流通閑静地なれば、御養生旁不相替御来浴希上候。御旅泊御料理 元祖向島秋葉有馬温泉敬白」(M26.8.17 東朝⑤)と広告、深川の社長が深川芸者と「平清の一酌に御機嫌となり、是から…向島の有馬温泉と云ふ寸法にしよう」(M26.6.22 東朝③)と企んだり、浅草見物した四人連れれの男の「一人の男向ふ島の有馬温泉へ夕飯をやりに行くと勧めると他の二人忽まち賛成…同家に到り一杯やって居る中、一人の男懐中より博奕に使ふ壺皿を取出し、この家なら大丈夫だから一寸一番と一六勝負を始め」(M26.10.11 東朝③)たと報じられており、

当初の湯治から次第に遊興目的に変化していった様子が窺える。また27年11月遊び人の男が女連れで「停車場より合乗車で向島の有馬温泉へ行き、四五日間の逗留に、思ふさま贅沢を尽し…今度は水神の八百松へ宿を替へて相変らずの酒浸し」(M27.11.30 東朝③)、31年4月にも「三人等しく有馬温泉へ行き、酒肴を始めとして芸者小千代お鯉の二人まで注文し飲みや唄へ」(M31.4.8 東朝④)と散財する様子が報じられており、料亭「平清」,「都下の割烹店中五指に入る」¹⁴⁾と称された八百松など著名な老舗ともども有馬温泉で「思ふさま贅沢を尽」くすのが当時の庶民の夢であったことが判明する。

好況の続く20年代までは業績は概ね順調のためか、28年4月「摂州有馬温泉支店 当温泉之奇功速なるを以て、日増諸君御来臨に付、猶座敷建築出来候間、不相替御来車奉希上候 向島秋葉有馬亭」(M28.4.5 読売④)と、料亭部分の「有馬亭」座敷の増築に踏み切っている。

3. 持主金子元助・勝太郎父子

しかし30年代に入ると34年の金融恐慌を底として景気が低迷を続け、遊興目的の顧客の減少が有馬温泉の経営に打撃を与えた。31年時点では「中之坊梶木源之助同店」であったが、電話番号を継承しつつも何らかの事情で地元の金子元助¹⁵⁾・勝太郎父子(向島請地町182)に譲られた。40年9月建立の梶木源次郎を顕彰する「炭酸泉記」¹⁶⁾碑文に向島有馬温泉への言及がないのは、この時点ではすでに梶木家との関係が絶たれたか、経営的に不冴等のため省略したかと推測される。荷風¹⁷⁾は大正5年に執筆した『矢はずぐさ』の中で金子元助について「墨上に有馬温泉を建て隠居す。二子あり。坂東秀調は其長子、藤間金之助はその次子なり」(矢はず, p230)と有馬温泉の創建者と見做している。荷風の「有馬温泉を建て」の意は金子自身が本店梶木の名義を借りた支店経営者(フランチャイジー)であったとも解され、早い時期から金子が遠隔地在住の梶木に代り支店の実務、出資面など、業務全般を実質的に担っていた可能性をも示唆しよう。

元助の長子・勝太郎(三代坂東秀調)の家業は「有馬温泉, 料理, 旅泊 所得税4円00銭」(紳M31, p193)、明治13年11月7日「向島有馬温泉の息子として生れ」(S10.9.23 東朝①訃報), 「向島有馬温泉の構内に住居」(日記, p353)し、昔からの芸事仲間から「有馬温泉の勝ちゃん」¹⁸⁾と呼ばれた歌舞伎俳優であった。勝太郎は当時未成年で父の元助が「後見」(M33.12.1 東朝④)として万事処理していた。

4. 有馬温泉の物件売買を巡る紛議と客筋の変化

明治32年4月上旬江橋信¹⁹⁾が「前持主金子勝太郎より該建物悉皆を代金五千五百円にて譲受け」(M33.12.1 読売④)た。この頃、勝太郎は二代目秀調の養子となり、坂東勝太郎を名乗り舞台上で活

躍中で、「永年有馬温泉方の料理番を勤め居たる」(M31.3.1 東朝⑤)菅井竹次郎が先頃病死したことが譲渡の背景として推測される。売買契約の内容は総額の1割弱「金五百円を入金し、残額は月賦の約束証書を作」(M33.12.1 読売④)り、「江橋の妻の実家」(M33.12.1 東朝④)の鈴木八十八⁰⁴が保証人となった。「有馬温泉は…鳥八十分店の名義にて開店し来りしも」(M33.12.1 読売④)、「客足思はしからず、収支も相償はざる有様なれば江橋は大いに失望し、為に入金も滞り勝となり」(M33.12.1 東朝④)、「不景気続きのため、月賦金は二百五十円を入金せしのみ」(M33.12.1 読売④)という業況に「旧持主たる金子父子は立腹し…法定の手續をなし」(M33.12.1 東朝④)た結果、以下のような紛糾を露呈した。「前持主勝太郎より屢々江橋に督促の末、去九月中遂に弁護士秀島虎次郎を以て、証人鳥八十の財産を差押へしかば、突然のこととて鳥八十は驚き、懇意の弁護士安藤兼吉に一切を委任し、同弁護士が夫々奔走して…証書の無効なる所以を申立て、勝太郎方より該費用を負担して一段落を告げ」(M33.12.1 読売④)た。弁護士は「金子父子の戸籍を調しに未丁年の勝太郎は庶子となり、実父元助は同居人となり居る」(M33.12.1 東朝④)点を発見、「元助が作成せし公正証書」(M33.12.1 東朝④)の瑕疵を突いた結果、「父子の者も此議論には当惑し、早速鳥八十の差押を解」(M33.12.1 東朝④)いたのであった。この際「江橋は到底営業持続の見込なしとて、温泉の建物一切を勝太郎に戻し、是迄の入金五百円と二百五十円は昨年四月以来の家賃として」(M33.12.1 読売④)一件落着かに見えた。しかし「其際江橋は他出中にて其相談に立会わずとて、家屋の返戻を拒み、荏苒日数を涉り居りし処」(M33.12.1 東朝④)、証書の無効理由が「勝太郎が未丁年者なる」(M33.12.1 読売④)点にあったため、「去十一月二十六日にて丁年者となりし処より前証書を追認して、翌二十七日江橋が財産差押を喰ひ、此に再び両家の紛糾を生じ」(M33.12.1 読売④)る泥試合を演じた。各紙に大きく報じられた醜聞は有馬温泉のブランドに悪影響を及ぼしたと考えられる。

その後の客筋の低下が窺える記事として36年3月逃亡中の犯人が「秋葉神社内有馬温泉に遊び居る処を取押へられ」(M36.3.12 読売④)たり、37年3月「向島なる有馬温泉の樓上に神田正則学校外三校の生徒三四十名集まり、友人某の米国行送別会を開き…火鉢の地雷火の各所に爆発し、吶喊の聲はさしもの樓上を揺崩さんばかりの所へ急報に接して数名の警官駆付け漸く此場を取鎮め」(M37.3.31 東朝⑤)た若者の悪戯や、38年4月「病氣にて温泉に入浴し度く思へど多分の持合わせ」(M38.4.4 読売③)ない「怪しの兵士」の徘徊等も報じられている。41年7月11日泉鏡花、長谷川時雨ら文人・芸術家ら数十名が参加した「化物会」の最初の会合が有馬温泉で開催された。当会の文学的に興味深い意味合いは東雅夫氏の先行研究(怪談, p51～70)に詳しいが、客筋の好ましからざる変化という筆者なりの文脈からは「化物会」の舞台に相応しいと選択されたのか?という印象もある。

5. 有馬温泉弁天合資会社設立の背景

ここで有馬温泉末期の経営状態を数少ない史料である商業登記簿²¹⁾から推量してみたい。有馬温泉弁天合資会社は大正2年4月1日「料理業」(帝 T5, p223)を目的に本所区向島請地町182に資本金29,500円で設立された。設立時の原始出資社員は文末の「表-1」の通り。

設立早々の2年6月には「向島秋葉前 大改良和洋御料理有馬温泉弁天合資会社 電話本所五四三。△庭園広く数室の離家あり。種々遊技の設けもあり。清涼にして夏季の遊園に好適せり。△日本料理 松印五十銭, 竹印七十五銭, 梅印一円。△西洋料理 天印五十銭, 地印七十五銭, 人印一円」(T2.6.8 東朝①, T2.6.9 読売③)との合資会社名での最初で最後の広告を出した。広告中の「大改良」の大文字から、建築・納入業者への支払いの必然性が推測され、条件に合う出資社員として菅谷(土木建築請負)、岩本(洋家具及玉突台)、金坂(金屏風及家具)の3名が存在する。当時金坂の正味身代は債務超過、信用の程度は銀行取引停止(商工, p183)という窮況にあり、彼らは法人化に際し好意的に支援した余裕あるパトロンではなく、切羽詰まった立場から渋々出資に応じたものかと推定される。

また旧土地台帳を閲覧すると44年3月28日敷地の一部と推測される請地182番1は千葉ちゑ²²⁾から早川松之助(牛込区市ヶ谷船河原町)に移転するなど、広大な境内地182番地が数十筆に細かく分筆され、林泉幽邃を誇った神域がただの町場に変じ、温泉地たる立地条件が失われたことを意味する。新地主の早川が東海銀行取締役兼支配人(紳 M31, p64, 要 M44 役, p61)であったことなどを勘案すれば、多額の設備投資を敢行したものの客足が伸びず支払いに窮した有馬温泉への不良債権を私的に整理する方策(内整理)として、明治末期から境内地(=有馬温泉の借地権)の切売りと並行する形で、債権者が代物弁済(債務者たる金子一族から所有権の強制的移転)取得した有馬温泉物件一切を現物出資する形で第二会社を新設したのではないかと想像される。代表社員奥田正義と金子エイの二人は労務提供も行う無限責任社員であり、従前の経営者・債務者でもあろう。正味身代なしにも関わらず同居人菅谷ユウの1,000円と併せ3,500円を出資した菅谷も、家業を放り出して同社支配人(帝 T5, p223)に就き回収に専念したかと思われる。

同社の存立時期は定款上満20ケ年、商業登記簿閉鎖は平成2年6月14日であるが平成までの存続を意味しない。大正5年版まで毎年に掲載された『日本全国諸会社役員録』6年、7年版からは見当たらず、朝日・読売両紙への広告出稿も途絶えたことと併せ、この時期の同社の衰退・休眠化を暗示していよう。荷風も『桑中喜語』の中で「秋葉神社のほとりに是有馬温泉とよぶ連込みの茶屋大正五、六年頃までありしやに覚ゆ」(桑中, p422)と記している。また大正3年5月10日金子元助の次男「藤間金之助、兼てより向島秋葉神社のほとりに稽古所を御普請中の処いよいよ落成」(大窪, p264)したのも、以前には当然に金子兄弟で居住していた有馬温泉を自己の稽古所としても使っていたのに、使用できなくなったため、弟子たちの便宜から近隣に別な稽古

所を新築したものと推定される。やはり合資会社の設立が、金子家と有馬温泉との間の関係を断ち切った契機と考えられる。事情に通じたはずの荷風が有馬温泉の末期にほとんど言及せず、冷たく「連込みの茶屋」視しているのは、昵懇な藤間金之助ら金子一族にとって相当に不名誉な展開であったためかと考えられる。また金子勝太郎（三代坂東秀調）の追悼記事にも「名女形とうたはれた華やかさの影には遺産とて殆どなく…所謂名門の親戚もなく…生活は不足勝ち、そこへ四月、舞台に倒れてからは収入の道は全く途絶え、そのまま没したので、残されたのは借金だけ」（S10.10.23 東朝⑩）との窮状が報じられており、かつて金子一族が所有していた有馬温泉が好調裡に永続し、終始一貫金子一族の経営が続く形で秀調の台所を支えていたとは到底考えられまい。また東雅夫氏が詳述された「化物会」の開催場所としても第一回の有馬温泉がその後再度登場した様子はない。（怪談, p42, 60）

Ⅲ. 花月華壇

1. 花月華壇の開業

関東における大規模遊園地の先駆の一つである著名な鶴見花月園（大正3年開業）には同一園主による遊園地「花月華壇」（明治33年開業、以下単に華壇と略）という先行形態が向島寺島公園に存在した。『墨東外史』収録の座談会（昭和32年8月）で齊藤栄次郎は「花月華壇は鶴見へ行ったという。明治四十年、四十三年の水でやられた…今の久保田²⁸の倉庫の場所である」（外史, p966）と証言するほかは、『墨田区史』『墨東外史』とも詳細な記述はない。

「庭園五千坪、眺望風致共に具備し、就中春夏秋冬花卉を栽培し、且つ種々の運動器具を備付、文明的の遊園地」（M33.4.13 東朝④）を標榜した華壇は「新橋にて其名高き割烹店花月の主人が、万金を投じて築きたるものにして…主人は、元來園芸の嗜好あることとて、今や専ら其設置に工風をこらし、明（34）年までには、一層完成の域に達せしめんと期しつつあり」（名勝）とされ、「高壮なる西洋造りの層楼」（名勝）は向島の名所であった。花月楼を継いだ若主人の平岡広高は明治32年5月「自分の社会に奉仕すべきひとつの事業」（国勢, p63）として「都人の静養を為す便宜としての、一つの遊園地を経営せん」（国勢, p63）と「向島寺島村辺は将来繁昌すべき土地なりとの見込みをつけ」（M35.6.21 都③）、当時人家も稀な低湿地の同村大字寺島字堤外2777番外の「面積五千余坪」（華壇）を入手した。平岡は小川一真撮影の写真を中心に33年4月11日発行した豪華写真帳『墨堤花月華壇営業案内』の序文で「拙者が花月華壇の設立を思立ち候は明治三十二年五月に御座候。其節は隅田の桜花満開して…空气清新心地すがすがしく相成、若し此所に美木を栽へ附け…景色を賞しなば如何に楽しからましと存じ、即座に華壇新設乃事を思立ち申し候

…庭園の諸処に田舎めきたる別荘をしつらひ、皆洋式のベットを附し、価を定めて一日或は一週間或は一ヶ月といふがごとく予め期限を極めて御用立て申し、又食物の儀も閣中にレストランを造り、和洋の料理何品にても、高需に応じる様致し候…拙者は斯様な計画を立てて、昨年七月起工仕、本年四月五日を以て未だ竣工に至らざると雖も、庭園の略落成したるに付、仮りに和洋料理調進所を設けて貴需に応じ、又御遊歩の御用に供へ申し候。追々落成の上はホテルとして旅宿の業をも開き可申候」(華壇、序)と開設趣旨を述べている。



写真-3 「花月華壇 対岸真崎稲荷社前よりの眺望」『営業案内』

33年4月の新聞には「向島寺島公園に新設したる花月華壇は工事中なるも、目下花期の候に際したるを以て、西洋料理を開始す。同園内極めて拓く、四季不絶の花弁を多く植つけ、左りに高く待乳、右に閑屋の里を望み、真崎と相対し、其中間に白帆の走るなど、頗る佳景且つ運動場を具備し、文明的の園遊地なり」(M33.4.15 読売④)とあり、開業時の広告でも「花月華壇の特色庭園五千坪、眺望風致共に具備し、就中春夏秋冬花卉を栽培し、且つ種々の運動器具を備付、文明的の遊園地なり。西洋料理は都下に比類なしと云ふて憚らず。御来駕を冀ふ。向島寺島公園花月華壇 電話浪速一九六七番」(M33.4.13 東朝④)と遊園地と西洋料理を売り物としていた。

開業した33年時点の案内書には「東橋を渡りて、長堤十里の風光を愛でつつ、白髯祠前に至れば、左方の芳草離々たる田園を隔てて、一の高楼を見るべし。白垂模糊として緑樹に對し、恰も、墨田河上を行く片帆の如きもの。これ花月華壇中の一図なり。見るからに、園内の模様を思ひやられて、自ら足の進むを覚ゑざらん。…墨田の流に枕し、向嶋の長堤に對し、富士と筑波を遠景に控へて、四時の眺望を集めたる花壇なり。境内殆んど一万坪に近く、奇草を栽え、珍木を植へ、園内には、瀟洒なる日本風の建築もあり、高壯なる西洋造りの層樓もありて、西洋料理の調製は、特に其意を用うるところとかさく。されば四季の遊覧場として適當なるは勿論、多人数の園遊会などを催すには、まことに屈強の場所なるべく、外国の紳士が、宿泊するにも亦た、尤も適當せるものならん。…墨田河辺の勝地たるは、夙に世人の知るところなり。この勝地にこの

名園あり。郊外の清興を求むる貴顕紳士は、まさにこの勝地に花壇にあそび、閑静なる楼上に坐して、待乳山の雪を賞し、木母寺の鐘をきき、墨田堤の花をながめ、鐘ヶ淵の帆影を吟せば、以て都門の塵を半日に洗ひつくすを得べし」(名勝)と絶賛された。翌34年4月頃の発行と思われる「各地名所案内 其二十三」も『営業案内』の序文から引用しつつ「花壇には四季の花卉を培養し、清香一日も絶ゆることなし。園内より眺むるに、隅田の桜花は白雲の鬣くが如く、荒川の清流は白銀を敷くか如し。遙か雲烟の間に富士、筑波の諸山隠見す…且つ空気流通の佳なる、恐らくは市中他に多く其比を見ざるべし…半日の閑あらば必ず此園を訪へかし」(花月, p47 所収)などと紹介している。

2. 花月華壇の営業状態

平岡個人経営たる華壇の経営資料を入手できなかったため、当時の新聞報道等で判明した限りでの華壇の営業振りを垣間見るにとどめる。営業の中心は行楽期特に花見時の大団体の園遊会招致であったようで、最大の華主の三井家をはじめ、安田系8社、朝日新聞社、京釜鉄道等の大手、小倉石油商店など中堅以上の企業・商店主らによる各種イベント利用も多く、団体客の人数は最大で1,500名程度とかなりの規模に達しており、当然に貸切営業も何度か報じられた。華壇の利用が報道等で確認できた著名人は近衛篤磨らの華族、雨宮敬次郎、渋沢栄一、安田善次郎、杉山茂丸らの政財界人、「横浜の某大尽」ら花月楼の鼻貞筋、森鷗外、谷崎潤一郎らの文人、映画制作者の高松豊次郎、落語家小さんなど、多種多様な客層に幅広く利用されていた。華やかな綺麗所が多数勢揃いした華壇の客筋を示す末期の絵葉書(著者所蔵)を写真-4に示した。



写真-4 「花月華壇英国艦隊軍医官歓迎会」絵葉書(銀座上方屋製)

38年10月訪日した英国艦隊の歓迎会が日比谷公園ほかで順次開かれ、「十八日医師有志は艦隊軍医官を歓迎せり」²⁰との記事に該当しよう。兼営したホテル業でも長期滞在の外人客の存在を一部確認できる。絵葉書の英国軍医は短期客であろうが、西洋造りの層楼、西洋料理の調製を売り物に、期限を定めて用立てた事例として、「花月華壇に止宿する独逸人カールツェン(三十五)とて桜組の雇外人」(M36.4.24 東朝⑤)が隅田川の汽船で同乗した女性と深い関係になったとの三面記事がある。桜組製革場は明治4年以降隅田川岸に立地(墨堤, p139)、近くにある近代的大工場の一つであった。また京釜鉄道の尾崎三良は35年11月9日「向島花月華壇に於て京釜倶楽部秋季大会あり…米婦人ミス・グードなる者偶然園内に入り来り…写真を撮り、去る。此グードは未婚なれども年已に四十を過ぎ、一人にて世界漫遊する者なりと云ふ」²¹と長期滞在と思しき米婦人に言及する。また「独逸国産茶褐色毛色、丈一尺位、大きさ二尺位、前肢の運びは恰もあひるの如き感あるを以て、名を『ダーク』と云ふ。右の犬紛失に付、御届候得者御札として金十円差出すべく候。向島花月華壇」(M35.9.29 東朝⑧)とのドイツ原産のDachshundらしき絵入りの高額懸賞金広告からも、愛犬同伴の長期滞在外人客の存在が裏付けられよう。

以下、33年4月5日開業以来の利用客に関する断片的情報を年代順に羅列する。まず①34年には3月27日近衛篤磨は「午前十時半出門、向島花月華壇に赴く。佐々木高美、千頭清臣、安田某等あり。外資の件に付話あり。其他囲碁等、四時に至り一先帰寓」²²と日記に記した。4月2日「多年唱道し来りたる鉄道国有…諸君の賛同を得たし」(M34.4.5 東朝③)との思惑で雨宮敬次郎主宰の「経済研究会は政友会に所属する代議士四十余名を…向島花月華壇に招待し、聯合大懇親会を開きたり」(M34.4.5 東朝③)。7月24日の広告で「花月華壇の朝顔其他いろいろの草花うつくしく咲出、貴紳令嬢の御遊覧を賜り度冀上候。和洋割烹墨堤花月華壇電話浪花一千九百六十七番」(M34.7.24 東朝④)と季節の草花を宣伝した。7月28日花月の主人平岡の案内で「横浜の某大尽」(M34.8.1 東朝⑤)が新橋芸者ら総勢28名を引き連れ、「日光はおっくうなり。箱根は混雑しさうなり。寧ろ向島の花月華壇へ行き川風に簾を捲かせ」(M34.8.1 東朝⑤)ようと川涼みを楽しんだ。9月24日「我社」(朝日新聞)は「トラックの設備あり…社員を挙げて同華壇に秋季運動会を催したるが、園ひろくして秋草多く、隅田川に臨みあることとて一日の清遊には最も適せる」(M34.9.29 東朝⑤)と推奨した。『営業案内』で「祝儀とか茶代とか…申受くる事を致さず」(華壇)と宣言したように「萬朝報社の茶代廃止会へ入会」(M34.9.29 東朝⑤)した「壇主が茶代廃止の良風たるを自覚し率先して之を励行」(M34.9.29 東朝⑤)する点も評価した。10月27日渋沢栄一が主宰する龍門社の第27回総集会在華壇で開かれ、渋沢自身も「保護貿易主義の必要を論ず」²³との講演を行った。このように一見好調な一方で、9月「花月華壇は華壇維持費として一箇月五十銭づつ出金する者を会員となし、毎月二十八日午後一時より大会を催し、余興として数番の懸賞自転車競争を行ふ」(M34.9.29 東朝⑤)など、有料の会員制を設け維持費の一部を回収しようと必死であったことも窺える。

次に②35年には7月「安田の八社清客を招待 安田家の関与せる安田、第三、明治商業の三銀行、帝国海上、東京火災、共済生命の三保険会社、安田製釘所及東京建物会社の八会社員の組織せる八社会にては、去七日午後五時より向島花月華壇にて例会を開き、今回清国より来朝せる鎮国將軍及吳汝綸氏の一行を招待…安田善次郎氏の歓迎の演述あり」(M35.7.10 中外)、7月新橋芸者「梅香は三井物産会社の株主狩野某に寵愛せられ常に向島の花月華壇へ出向いて御機嫌を伺ふにぞ…花月華壇の女中にお節介なる女ありて家橘と梅香との一件を旦那狩野に密告…」(M35.7.20 東朝⑤)とか、別の詐欺事件の関係者が「六名の芸妓をも伴ひ、二両の馬車を列ねて向島の花月華壇に赴き豪遊を極め…」(M35.7.29 東朝⑤)などと、豪遊の場として利用客の一端が窺える三面記事もある。9月14日「金物商大懇親会の景況 昨日向島花月花壇にて催したる同会は午前九時に開会…十二時頃より手品並びに烟花を余興に供し、時々奏楽ありて出席者一千五百名、頗る盛会なりし」(M35.9.15 読売③)、11月9日「向島花月華壇に於て京釜俱樂部秋季大会あり。是は京釜鉄道会社社員一同の組織に成る一の慰労会様のものにして、春秋二季に大会を催し、野外の運動遊戯を為し余興を催し、社員数月の労を慰し、各自の業務に対し楽しんで執務させる為めには頗る好成績あり。此日会する百二、三十名、頗る盛会なりし。在京重役も皆家族をつれて出席」²⁸

③36年～38年の3年間には利用客情報が激減、僅かに36年9月11日から13日毎日朝8時から夕方5時まで東京向島花月華壇でキリスト教徒の大集会²⁹があった程度である。おそらく35年「向島の花月華壇が大洪水で流失」(花月, p329)した後遺症や、戦時中で利用客も激減したためであろう。

④営業最終年度の39年には4月8日「日本橋小舟町二丁目の小倉石油商店³⁰…は花月華壇を占領し招待せし花主千三百名を駒形河岸より数回に華壇へ送り込み、種々なる余興等もありて当日第一の大連なり」(M39.4.9 東朝④)と報じられた。このため「本日…貸切り申候に付…入園謝絶の不得止儀と相成候」(M39.4.8 東朝①)と4月中有効な「祝捷紀念観桜券」購入者宛に広告し、5月東京書籍商組合は「花月華壇ニ於テ戦死者追弔祭ヲ挙行シ遺族ヘ弔慰金若干ヲ贈」³¹るなど、確実に営業が確認できる。11月13日華壇で聖書関係者集會が開かれ20名が参加³²との情報や、池上で開催の「弊壇東京競馬会へ出張店相設け候処、多大の御最眞に預り難有御礼申上候」(M39.12.4 東朝⑦)と12月4日朝日新聞への最後の広告を出しているが、華壇本体の営業の終期を特定するには至らない。

3. 花月華壇の閉園

末期の華壇の稼働状況を窺わせる記事に、品川的女子体育場の返却を陸軍省に迫られた「〈東京〉府教育会女子体育部にては其移転先の選定中なりしが、愈々向島花月華壇を一箇月二十五円

にて借入れ、一週一回即ち一箇月四回の専有運動場とすることに交渉略纏りたれば、運動機械器具の設備完成と同時に来月より開場することとなるべし」(M39.4.11 東朝)とある。春の稼ぎ時に全館貸切可能なのは、極端な低稼働に苦しんだ平岡が公共向特別料金で貸出に応じたためと推測される。

「花月華壇…君は之を経営する事七年、資本を投する事十万円、殆んど満身の努力を之に捧げた」(国勢, p63) 平岡の内情について、表面的には順調かにみえた35年6月時点においてさえ「自分は…大概は華壇の方に居り、馬車に乗りて往復し、本店の方は女房お蝶(三十七)と番頭某に任せ置くといふ有様なるが、同人が華壇へ注ぎ込みし金高は四万円ばかりとなり、最初の中は盛りしも、昨年来の不景気にて大華客の三井家の連中も手を締めて遊びに来らず、春秋の宴会も少なくなり、待合なども客の来ぬところから次第に身に影響して自然に、借財がかさみ」(M35.6.21 都③)との報道もある。かくして「当時此種の社会的事業は、まだ世人の嗜好を喚起する事難く、殊に向島の地は沿岸の低地なので、水害を被る事三回、此事業は終に失敗に帰した」(国勢, p63)とされる。35年「向島の花月華壇が大洪水で流失」(花月, p329)したのは、華壇の所在地(寺島村大字寺島)の小字名たる「字堤外」に起因する。「堤外」即ち隅田川の築堤の外側の河川敷か中州のような低湿地に立地したため洪水のリスクを回避できなかったと思われる。

39年暮ころ売りに出された「向島の名物花月華壇は新橋の『花月』から鈴木久五郎³⁹氏の手に渡り」(M43.4.7 東朝③)、「向島の花月華壇を邸宅に買入るやらの噂あれど、何といふも元より茶屋の造りに過ぎぬ彼塵家を然りとては富豪の棲むにも相応しからぬ」(M40.2.2 読売③)と疑問視された。当時鈴久は神田の書店から司馬江漢の書を買付け、「当世紳士の…珍書でも買はうとするは、何やら仏性ありとでも褒めて置かう」(M40.2.15 日本, p100)とか、朝鮮版『朱子大全』を「成金党の旗頭鈴久…自ら書肆に抵り五百金を投じて購ひ帰り…花月華壇を買収し文庫を設置するの意あり」(M40.3.15 日本, p48)との噂も流れた。読売は「去年の暮一味徒党を此処に集へ、額を鳩めて鐘が淵紡績会社の株を買占むる計略旨く運び、遽かに巨利を博したるより、其縁起を祝ふ為め此処に戦勝記念の邸宅に購へるなり」(M40.2.2 読売③)として、購入動機を単に「幸先よき花月華壇」としている。読売は後年にも「鈴久は相場策動の場所を得るために、先づ向島の花月華壇を買入れて、そこで縦横の奇策を巡らした」(S3.11.10 読売⑫)と解する。自宅から遠すぎる華壇を個人の別荘として買収した鈴久は「豪華な二頭立馬車を一時に四台も注文」³⁹するなど、日々酒池肉林三昧の豪遊・散財を重ね、紀文そのけの露骨な成金ぶりを遺憾なく発揮して連日紙面を賑わせた。

鈴久買収後の華壇に関する消息は乏しいが、朝日は40年3月「花月華壇の梅は尚人足を惹くに足らねど、春暖のそぞろ歩きに杖を曳かば閑静の遊びなり」(M40.3.6 東朝⑥)、「差支ふるは団体の花見連の集まる場所に乏しき事にて、小松島、花月華壇の外には秋葉神社の境内などあれど…所詮足るべしとも思はれず」(M40.3.13 東朝⑦)と、なお華壇の遊覧可能性を示唆する。しかし

40年4月精華堂が発行した「大日本東京全景之図」⁶⁹には梅若社・木母寺と小松島との間に華壇らしい建物は描かれていない。一時名声天下を圧した鈴木も40年1月「株式市場は沈衰して、権利株券の市価は暴落せり、成金党の旗頭たる鈴木久五郎すら、十万二十万の現金の支出に苦む程」(M40.3.15 日本, p5)に没落、同年3月には「鈴木氏は、遂に身動きのつかぬ為め、九日迄に炭礦、東鉄、鐘紡の株を悉く投尽くした」(M40.3.12 読売②)、4月には「相場は急転直下、氏は惚焉として雲隠れ…一切の払は停止」(M40.4.11 読売②)と報じられ、本人は「まあ待って呉れ給へ。今に大飛躍を試みるから」(M41.11.26 読売③)と強がってはみたものの「世間からは全く無一物になった」(M40.8.22 読売②)と見られた。日露戦後の成金代表の「鈴木久五郎が成功を急ぐ青年の渴仰の目標となって彼が成功の経路、人為、気焰は当時天下を風靡した」(T11.8.30～9.7 国民)が「槿花一朝の夢と消えて彼は多くの青年を毒し多くの青年を遇った不屈者と悪罵された」(T11.8.30～9.7 国民)とされた。

オーナー・鈴木久の失脚後、「二万五千円で加藤銀行へ抵当に入て、狸の住家⁶⁹になって居る」(M43.4.7 読売③) 華壇を瀬島庄吉(浅草福吉町)、吉田喜太郎(下谷区入谷町)、条川与吉(入谷町)が「此花時に捨てて置くのは惜しいと…三人相談の上、桜を当に一寸借受けて開園」(M43.4.7 読売③)、「花月華壇は開放して公衆の遊覧場所」(M43.4.6 東朝⑤)にする案をたてた。その内容は「浅草公園芸妓を元禄時代の花見の衣装と寸分違はぬ粋な扮装をさせて踊らせて客を引き、外に飛入勝手の素人相撲、大神楽、馬鹿囃し等を催し、酒よし、団子よし、何でも販売する計画」(M43.4.7 読売③)であった。読売の「△坊」も「花日記」の特ダネ記事として「向島の名物」だった「花月華壇の復活」(M43.4.7 読売③)を大きく取り上げた。その後の華壇の消息は未詳であるが、華壇の跡地の一部と推測される隅田村字堤外1409番地の土地は大正9年4月三菱合資から日本活動写真へ売却されており、大正2年10月日活が「東京府下南葛飾郡隅田村千四百十二番地(白髭橋傍の小松島停船所から北へ約三丁)の隅田川畔にある杉山茂丸の別荘」⁷⁰たる其日園に建設した向島撮影所敷地の一部を構成したかと推測される。別荘主の杉山は「多年の重荷を卸し体の養生に取掛る筈にて向島の花月華壇に引籠り…僕は又向島へ帰って居た」(M35.3.6 東朝②)と長期滞在するほど気に入っていたから、鈴木から杉山あたりへの移転、地番の近さからほぼ隣接すると想定される向島撮影所敷地への統合の可能性も今後検討の余地がある。

IV. むすびにかえて

冒頭に掲げた谷崎潤一郎「幫間」の「兜町で成り金の名を響かせた…旦那」のモデル⁶⁸はどうか鈴木久のようであり、「所謂鈴木一派」(M40.3.12 読売②)を花見船に乗せて、自己が昨年末に買収した華壇に乗り込む様子かと解される。実父が蠣殻町の米穀仲買人であり、「仲買人の生活

は最も熟知」(橋本, p449)する谷崎が「僕は幫間つてもものを書かうと思ってる」(橋本, p450)と構想を語った明治43年11月以前の新聞雑誌には連日鈴久の成金ぶりが報じられていたので、相場界を知る谷崎も関心を持って読んだ可能性が高い。40年3月1日本拠たる鈴木銀行が取付に遭遇、金主の平沼延次郎も同年4月7日投身自殺、借金返済で「身動きのつかぬ」(M40.3.12 読売②)鈴久がはたして、かように豪快な花見が出来たのかどうかの詮索は小説には相応しくあるまい。谷崎が「異形なるくろ首の変装人物」を登場させ、長い首が伸びて動き回る「道化踊り」の記述は、その実「借金で首が回らぬ」鈴久への痛烈な皮肉ともとれよう。いずれにせよ、「成り金の…旦那」は没落、華壇は競売、「四十三年の水でやられ」(外史, p966) 流失という運命だから、「幫間」の滑稽な世界は崩壊寸前の成金の生態を活写したものとして、高松豊次郎制作の「活社会の玉乗り」³⁹⁾の盛業中の39年の映像と同様に、貴重な得がたい風俗記録であることは間違いなし。制作した高松は鐘淵紡績で現場労働者の実体験もあったから、鐘ヶ淵に程近く土地勘のある広大な華壇を、出世競争の舞台として日比谷公園とともに選んだものであろう。都心の日比谷が実業家・高官としての「上り」舞台とすれば、成金・虚業家の没落の末路として華壇を対比させたのかどうかは、映像を実見する機会を得ない筆者には判定できないが…。

本稿で取り上げた花月華壇と有馬温泉とは、前者が広大な庭園を売り物に団体向園遊会を得意とする大型洋風割烹であるのに対して、後者は粋な個人客向の純和風の鉱泉宿であって、両者の客層は全く異なり競合関係にはなかった。しかし両者に共通して当初は一流料亭・旅館主による独自の革新的な着想から出発したものの、現実には経営難のために短命または経営主体の移転が不可避で、いわば竜頭蛇尾に終わった点が挙げられる。

すわわち華壇は外国人の長期滞在型施設を、有馬温泉支店は本家有馬温泉を模した「疑似温泉」を東京に再現し、有馬名産の竹細工など名産品を販売するアンテナ・ショップを当初志向した。華壇は小川一真撮影の豪華写真帳である『営業案内』掲載の写真で、有馬温泉の情景は『風俗画報』の増刊号の『東京名所図会』の記事と挿絵で、往時の盛況ぶりを偲ぶことができる。両者とも有名な近郊の観光施設でもあったためか、当時の新聞雑誌等に動向が伝えられたり、ここを舞台とする色恋沙汰が三面記事として紙面を賑わすことも少なくなかった。とりわけ有馬温泉の経営者自身が歌舞伎の名女形として活躍した人物で、永井荷風との因縁も浅からぬものがあり、荷風等の文芸作品にもその名が何度も登場している。したがって、華壇の近接地に大正期のみ存在した日活の向島撮影所ともども遊興・遊覧の巷としての当時の向島を象徴するランドマーク的な位置付けにあったとみることもできよう。向島撮影所も不幸なことに関東大震災で被災崩壊し、京都の太秦に移転を余儀なくされた。太秦の近くには保津川・大堰川に沿った名勝地・嵐山があり、同様に料亭・鉱泉宿・大河内伝次郎など著名人の別荘が集中、その後関係者の弛まぬ景観保全努力も奏功し主要な観光地として現在に至っている。

しかし向島では華壇は堤外の低湿地に立地したため洪水のリスク⁴⁰⁾が避けられず、また有馬温

泉は人気役者のサイド・ビジネスに変じて経営に身が入らなかった。両者ともに高コスト構造のなかで、34年の金融恐慌・日露戦後の不況による優良顧客層の減少に苦しみ、赤字基調を脱却できなかったと推測される。さらに華壇の所有権を継承した鈴木が成金の典型であったため購入して間もなく没落、ほとんど活用・転用策もないまま放置され43年の洪水で姿を消したのと思われる。買い手が成金の鈴木でなく、風致保存に理解ある小倉常吉のような篤志家であれば同じく被災した百花園の事例のように今少しは存続できた可能性もあろう。また鈴木に購入資金25万円を用立てた加藤銀行⁴¹⁾も遠方の福島県郡部の名も無き弱小銀行であり、鈴木に連鎖後間もなく廃業に追い込まれたことから、活用・転用策をじっくり立案する企画力もなかったと考えられる。

有馬温泉は大正2年に合資会社組織となり、表面的には経営組織が充実したかの印象を受けるが、内実は全く逆であった可能性が高いと見られる。有馬温泉の名は関係の有無は別として周辺の銭湯⁴²⁾の名として、また花月華壇の名も同一経営者による花月園（横浜市鶴見区）という、全く別物の著名な遊園地の名に僅かに名残をとどめていたが、現在では共に姿を消してしまった。

かくして、残念ながら本稿で取り上げた両施設とも、現在では当時を偲ぶ縁（よすが）とて乏しく、わずかに上記銭湯の跡地に建つマンションにレリーフが掲げられている程度に過ぎない。向島と同様に撮影所・料亭等が集積した都市近郊リバーサイド・リゾートたる京都嵐山の場合は、近傍の東映映画村ともども現役の観光施設として盛業中であるのに比して、向島では墨堤の桜をはじめ「大正の初年を境として墨東の樹林は姿を消し」（区史, p1644）、「工場年々逐テ相興リ、煙突空ヲ衝テ漸多シ」（外史, p1305 所収）と変貌した。このため明治30年には「大磯箱根と京地を離れての避暑は扱ておき、一寸一日の納涼には向島なる有馬温泉などは至極妙なりとて続々出かける向もあり」（M30.7.29 読売⁴³⁾）と重宝されたものが、「大正と世も変って向島が東京からの日帰り行楽地であるお株は、箱根、熱海に取ってかわられ」（S29.10.30 読売江東版）、「今の人の想像も及ばないほど美しく静かだった」（外史, p1518 所収）向島の風致は「文化・文政期から幕末・明治にかけてのころが盛時で…今や住む人からも忘れられ」（区史, p1662）ているとすれば誠に淋しい限りである。

同様に痕跡をとどめぬ日活向島撮影所跡には由緒を詳述した案内板やWEB上の観光案内が充実しており、観光客にも興味を抱かせる仕掛けが工夫されている。幸いにも今後多く期待されるスカイツリーの観覧客が少し足を延ばして周辺の向島百花園などを訪れた際などに、同様な遊園・遊興施設が向島に点在して、互いに妍を競っていた明治・大正期の向島の華やかな往時を想起するとともに、向島の風物を愛した永井荷風との因縁⁴³⁾をはじめ、施設に関係した梶木源次郎、金子勝太郎（三代坂東秀調）、平岡広高、鈴木久五郎らゆかりある観光資本家⁴⁴⁾群像の個性的な生き様を偲んでもらえる工夫を加えれば、より実りある「こだわり旅」⁴⁵⁾の成果が得られるのではなかろうか。

表一 有馬温泉弁天合資会社の原始出資社員9名の一覧表

<p>*無限・代表社員 奥田正義 [本所区向島須崎町93番地, 6,500円] 有限・菅谷豊次郎 [南葛飾郡吾嬭村字請地226番地, 2,500円/10年前開業の土木建築請負, 大正2年度所得税6円, 商内高未詳, 正味身代「無」, 信用の程度「普通」(商工, p540), 大正5年では有馬温泉弁天の支配人(帝 T5, p223)]</p> <p>*有限・前野勝三郎 [本所区向島請地町120番地, 2,500円]</p> <p>*有限・菅谷ユウ [南葛飾郡吾嬭村字請地226番地, 1,000円/菅谷豊次郎の同居人] 有限・岩本半三郎 [芝区愛宕下町1丁目1番地, 5,000円/50年前開業の洋家具及玉突台, 大正2年度所得税71円, 商内高35,000~50,000円, 正味身代「1~2万円」, 信用の程度「普通」(商工, p27)]</p> <p>*無限・金子エイ [本所区向島請地町182番地, 6,000円/元持主の金子勝太郎(昭和10年9月死亡。家族名には該当なし)や実父の金子元助(大正9年3月病死)との関係未詳ながら, 住所が向島請地町182であり, 金子一族かと推定される。] 有限・金坂弥惣次 [京橋区南鍋町2丁目4番地, 2,500円/13年前開業の金屏風及家具, 大正2年度所得税11円, 商内高3,000~5,000円, 正味身代「負債」, 信用の程度「取引停止」(商工, p183)]</p> <p>*有限・服部竹治郎 [浅草区北富坂町17番地, 2,500円]</p> <p>*有限・石附鉄三郎 [本所区松井町3番地の5, 1,000円]</p>
--

[凡例] *印は『商工信用録』(大正3年, 東京興信所)に記載なし。

[史料] 有馬温泉弁天合資会社閉鎖登記簿(登記番号第五四四四号)謄本(東京法務局墨田出張所)を『商工信用録』や諸 T5 上, p334, 帝 T5, p223 等で補完

注

- (1) 『谷崎潤一郎集』『日本近代文学体系』第30巻, 角川書店, 昭和46年, p132~134所収
- (2) 佐藤忠男「日本映画の成立した土台」今村昌平ほか編『日本映画の誕生 講座日本映画1』岩波書店, 昭和60年, p6~7
- (3) 拙稿「嵯峨・嵐山の観光先駆者—風間八左衛門と小林吉明らによる嵐山温泉・嵯峨遊園両社を中心に—」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第10号, 11号, 平成22年10月, 平成23年3月参照。
- (4) [新聞・雑誌] 東朝…東京朝日新聞, 読売…読売新聞, 中外…中外商業新報, 都…都新聞, 国民…国民新聞, 日本…日本及日本人/[会社録] 諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所, 紳…『日本紳士録』交詢社, 要…『銀行会社要録』東京興信所, 帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所, 商工…『商工信用録』大正3年, 東京興信所/[類出資料] 外史…前島康彦編『墨東外史 すみだ』墨田区, 昭和42年, 区史…『墨田区史』墨田区, 昭和34年, 日記…永井壮吉『永井荷風日記 第五巻』東都書房, 昭和34年, 日乗…『断腸亭日乗 卷之四』永井壮吉『永井荷風 日記 第一巻』東都書房, 昭和33年, 大窪…永井壮吉「大窪だより」『荷風全集 第十一巻』岩波書店, 平成5年, 矢はず…永井荷風「矢はずぐさ」『荷風全集 第十二巻』岩波書店, 平成4年, 桑中…永井荷風「桑中喜語」『荷風全集 第十五巻』岩波書店, 平成5年, 墨堤…『新撰東京名所図会 第十二編, 墨田堤之部(中)』『風俗画報』増刊, 東陽堂, 明治31年(昭和44年陸書房復刻), 華壇…平岡広高編『墨堤花月華壇営業案内』小川一真印刷, 明治33年4月, 頁付なし, 名勝…瀬川光行編『日本之名勝』史伝編纂所, 明治33年12月, 頁付なし, 国勢…柏村一介『昭

明治期近郊リバーサイドリゾート経営のリスクと観光資本家

- 和国勢人物史』極東社、昭和3年、橋本…橋本芳一郎補注（幫間）『谷崎潤一郎集 日本近代文学体系』第30巻、角川書店、昭和46年、花月…斎藤美枝『鶴見花月園秘話 東洋一の遊園地を創った平岡廣高』鶴見区文化協会、平成19年、怪談…東雅夫『江戸東京怪談文学散歩』角川選書428、角川学芸出版、平成20年
- (5) 先代の梶木源次郎（明治以降は源治郎）は文化9年生れ、有馬郡湯山村庄屋等を経て、明治元年（「中の坊と有馬温泉の今昔」「中の坊瑞苑」公式ホームページ <http://www.zuizen.jp> 平成23年7月10日検索）老舗旅館「中の坊」から営業権を継承し開業した。梶木は明治5年（60才）で初代湯山町長となり、6年杉ヶ谷の炭酸泉源を開発し「炭酸水」として観光客に販売した功績を讃える顕彰碑が炭酸泉源公園内に建つ。源之助（源次郎長男）が明治25年1月20日家督相続し、30年時点で「中之坊」二代目館主であった。（野崎左文『漫遊案内』明治30年、p217）湯の花を移し本家の著名温泉を名乗る「疑似温泉」全般は稿を改めたい。
- (6) 秋葉神社（向島四丁目9番13号）現宮司・千葉元氏の話では「秋葉神社は殿様がスポンサーだったので、明治の時代になってだんだん貧乏し敷地を売って行った」（「有馬温泉ブログⅡ、有馬温泉アンテナショップ」2009.4.11）由である。
- (7) 『新選東京名所六十一編』には「庵崎の旧況 庵崎とは俗に今の請地町秋葉神社の近傍を称す。明和頃より天保年間までは、此辺繁昌して、料理店多く各々生簀を設け、鯉魚を蓄ふて食膳に上ぼす。酒客のここに来りて酔を買ふもの尠からず。中に就き…『むさしや』即ち麦斗庵の如き、最も繁昌せしといふ。今は須崎町九十一番地に鳥料理『あづまや』あるのみ」（田中市之助編『新選東京名所六十一編』本所区の部其三、『大日本名所図会』東陽堂、第62号、明治41年、p163）とある。
- (8)35 「大日本東京全景之図」明治40年4月精華堂発行（『荷風全集（全三十巻）』付録『荷風文学地図』岩波書店、平成5年所収）
- (9) 法務局墨田出張所備付の請地町の旧地籍図によれば、地目「社地」の180番（秋葉神社）から分筆された180番3などを含む現向島五丁目と、東武鉄道敷地を含む現押上二丁目に二分された模様で、旧土地台帳によれば182番地はその後70余の枝番に分筆されている。震災・戦災に続き、近年の防災拠点・再開発等のため、社寺も移転するなど往時との対応関係の把握が難しい。
- (10) 守田治兵衛は「宝丹」で有名な薬種商、「本社信徒の一人にして、常夜灯の建設に力を尽」（墨堤、p70）し常夜灯に刻名されるなど秋葉神社信徒総代的役割を果たしていた。梶木源次郎は有馬温泉「炭酸水」販売に注力していたから、守田とも炭酸水での取引があったものと推定される。
- (11) 向島須崎村甲72番地の上村英之輔が「官許硫化鉄温泉 向島牛御前まへ湯本千歳亭」が「早わかし喚湯掛流し温泉所」（M12.10.22 読売④）を明治12年6月11日より先行して開湯した。（M12.6.10 読売④）
- (12) 旧「有馬湯」跡に建つマンションの入口の「向島有馬温泉縁起」銅版にも当該図を掲げ、「その後この地に『有馬温泉』の名に因んだ銭湯が誕生し、地域の人たちの『憩いと語らいの場』としてともに生きてきました」と記している。

- 13) 梅若六郎他監修『梅若実日記』第5巻, 梅若実日記刊行会, 八木書店, 平成15年, p30
- 14) 日下部明國編『日本案内 上』, 開国社, 大正5年, p118
- 15) 金子元助について妻の八重が「日頃親しく尋来る向島の隠居金子翁といふ老人」(矢はず, p229)の経歴を「金子翁名元助。天保御趣意の前年江戸和蘭陀屋敷御同心の家に生るといふ。清元の三絃をよくし、また宇治の太夫となりて金紫の名あり。瓦解の後、商となり横浜に出で産を起し」(矢はず, p230)たと詳述する。
- 16) 明治政府高官男爵田中芳男篆額(「顕彰石碑 森琴石」www.azumanet.co.jp/test/morikinseki/kinseki/morike.htm 平成23年7月10日検索)
- 17) 大正3年8月30日永井荷風と八重は因縁深い有馬温泉(妻の養家=自宅での挙式に近い)で敢えて挙式せず、無理やりに「八百善」に依頼して開いたことも、末期の有馬温泉と金子家との疎遠な関係(むしろ対立関係か)を示唆しているのではなからうか。
- 18) 松永和楓「交際が下手」『演芸画報』第24巻, 第6号, 演芸画報社, 昭和5年6月, p105
- 19) 江橋信は31年時点では下谷区上野町2丁目22会社員, 所得税4円01銭(紳M31, p441)
- 20) 鈴木八十八(下谷区上野元黒門町4)は「料理店」鳥八十を経営し, 所得税5円75銭, 電話本局1585番(紳M31, p594)
- 21) 「閉鎖登記簿謄本」
- 22) 千葉ちゑは秋葉神社宮司・千葉元氏の先祖に相当か?
- 23) 「久保田」は久保田鉄工の敷地(昭和31年8月取得した隅田町一丁目1409番地)。
- 24) 『近事画報 英国艦隊歓迎画報』第70号, 近事画報社, 明治38年10月20日, p19。初日の10月12日開催された東京市長主催の英国艦隊歓迎の園遊会が無粋な公式行事だったのに対し、華壇では葉書に「ならびたまへるひなどのは、このたびはるばるわが国ををとずれたまへし異国の君をなくさめんと、心をつくしたまひたる君にて候」と歓待ぶりが記されている。
- 25) 尾崎三良『尾崎三良自叙略伝』下巻, 中央公論社, 昭和52年, p220, p219
- 26) 近衛篤磨『近衛篤磨日記 第4巻』近衛篤磨日記刊行会, 鹿島研究所出版会, 昭和43年, p121
- 27) 鳥田昌和「明治後半期における経営者層の啓蒙と組織化」『経営論集』10巻1号, 文京学院大学, 平成12年12月, p18
- 29) 32) 「大集会・聖書講習会一覧」「キリスト同信会100年史年表」www.doshinkai.org/index.php?option=com...view. 平成23年7月10日検索)
- 30) 石油商店主の小倉常吉は寺島に在住, 明治43年の大洪水以降深刻な経営難に陥った百花園に対し大正4年園主から敷地を引き継ぎ、再建と経営を支援した篤志家。
- 31) 大柴四郎『東京書籍商伝記集覧』東京書籍商組合, 大正元年, p63
- 33) 鈴木久五郎と武藤山治との因縁は拙稿「カネボウの“神様”武藤山治と“成金”鈴木久五郎」『滋賀大学経済学部附属史料館にゆうす』第21号(www.biwako.shiga-u.ac.jp/shiryo/siryou.../21siryou_web.html)

- 34) 鳥羽欽一郎「武藤山治と相場師鈴久の対決」『別冊中央公論経営問題 昭和40年秋季特大号』中央公論社、昭和40年9月、中央公論社、p288
- 36) 41年8月15日森鷗外は文部省直轄学校教授（紳M31, p155）の「荻野由之と花月華壇に会す」（森林太郎「明治四十一年日記」『鷗外全集著作篇 第31巻』岩波書店、昭和27年、p39）と記しており、「狸の住家」と矛盾する。
- 37) 坂本正編『日活四十年史』日活、昭和27年、p41。「杉山氏は故兒玉大将の愛顧を受け、老後は向島の此別邸に閑居して風月を偕に楽しまん」（M42.9.11 東朝⑤）と計画した。
- 38) 横浜の某大尽は花月華壇で折からの暑さに「興を催し、誰でも隅田川へ飛込んで水泳競争をする者はないか。勝った人には金時計を遣るから泳げ泳げ」（M34.8.1 東朝⑤）と成金ぶりを発揮した。
- 39) 平岡の花月楼は明治32年6月ころ初期の活動写真「芸妓手踊り」等の舞台として度々登場する。（入江良郎「最古の日本映画について——小西本店製作の活動写真」『東京国立近代美術館研究紀要』13号、平成21年3月、p78以下。新奇を好む平岡側の働き掛けの可能性を示唆しよう。
- 40) 同様な立地の嵐山の嵐峡館の「やり手」経営者だった中路明の孫にあたる中路裕氏は中路「重之さんご夫婦（明の父母）は昭和26年7月11日、嵐山の山津波で亡くなっています。嵐峡館も押しつぶされています」（2010年9月15日筆者宛私信）と山津波リスクの恐ろしさを証言する。
- 41) 加藤銀行は明治34年福島県坂下町に加保銀行として設立、36年10月改称、42年「取付ニ遭ヒテヨリ経営困難トナリ…整理シツツアリシモ、資金ノ融通絶へ」（大蔵省『銀行事故調・全』（渋谷隆一監修復刻解題）、駒沢大学『経済学論集』第6巻臨時号、昭和51年3月、p60）大正元年8月5日休業した。
- 42) 東雅夫氏が「怪談会に打ち興じた幽邃郷は、やがて下町の住民たちが憩う銭湯に姿を変えて、平成の世まで生きながらえていた」（怪談, p67）と推定した「公衆入浴の業務」目的の株式会社有馬温泉（向島5丁目38番18号）は閉鎖商業登記簿上では設立の昭和26年4月28日までしか遡及できず、有馬温泉との系譜上の連環を確認できなかった。
- 43) 荷風と藤間金之助は「年来昵懇」（大窪, p264）で、荷風の愛人・八重次は親代わりの金子元助の養女となった上で荷風と結婚するなどの因縁があった。（矢はず, p229）
- 44) 平岡は数年前静岡県鈴川海岸に避暑・避寒の旅館を経営し、「海嘯の為に家屋を破壊され、大損毛をなしたりしも之に屈せず」（M35.6.21 都③）、花月華壇で同じ過ちを犯すなどハイリスクを愛好する性癖が観取される。鈴久は「土一升金一升又た廉のみ。我れ日本橋枢要の地三千坪を購ふて一大庭園を作らん」（M40.2.15 日本, p40）と揚言し、「北海道、秩父、飛騨、美濃、下野等に大山林六万町歩」（鳥羽前掲稿, p282）を買いつけ、『日本策士伝』によれば「東京湾の洲崎と羽田に『埋立地』四〇万坪を買入れ」（小島直記『日本策士伝』1989年、中央公論社、p377）るなど、不確実なものに取って投資する大口不動産投資家でもあった。
- 45) 拙稿「跡見流こだわり旅」『跡見学園女子大学観光マネジメント学科紀要』創刊号、平成23年3月、